

# ヘテロジニアスな世界 光瑠×牛人

令和5年9月16日（土）— 10月22日（日）

- ・作品Noは展示会場の陳列番号と一致しますが、陳列の順番とは必ずしも一致しません。
- ・出品作品は都合により変更される場合があります。
- ・展示品、展示ケースにはお手を触れないでください。
- ・会場内での写真・動画撮影、飲食はできません。
- ・会場内でのスマートフォン、携帯電話、タブレット等の使用はお控えください。筆記用具は鉛筆をご利用ください。

- 主 催 = 高岡市美術館（公益財団法人高岡市民文化振興事業団）、北日本新聞社
- 後 援 = 富山県、高岡市、高岡市教育委員会、富山県博物館協会、読売新聞北陸支社、NHK富山放送、北日本放送
- 企画協力 = 富山県水墨美術館、南砺市立福光美術館、富山市篁牛人記念美術館
- 協 力 = 富山県美術館
- 協 賛 = 日本通運株式会社北陸東支店

No.	作者名	作品名	制作年		材質・技法	寸法(縦*横)	所蔵	備考
<b>一、画家、立つ</b>								
K1	石崎 光瑠	富山湾真景図	1898頃	明治31頃	紙本着色 屏風六曲一双	各155.0*328.0	南砺市立福光美術館	
K2	石崎 光瑠	立山写生画卷	1908	明治41	紙本着色 卷子	31.0*576.5	富山県美術館	
K3	石崎 光瑠	立山写生 巻二	1908	明治41	紙本着色 卷子(全18図)	42.7*534.4	高岡市美術館	
K4	石崎 光瑠	立山登山 高山植物	1906	明治39	紙本着色 額	28.5*35.5	南砺市立福光美術館	
K5	石崎 光瑠	高嶺百花譜	1908	明治41	絹本着色 画帖(上下巻)	25.4*33.0	南砺市立福光美術館	
K6	石崎 光瑠	サルノコシカケ			紙本着色 額	38.3*25.7	南砺市立福光美術館	
K7	石崎 光瑠	麦穂			紙本着色 額	37.0*25.0	南砺市立福光美術館	
K8	石崎 光瑠	鶴図		大正初期	絹本着色 屏風六曲一双	各147.5*356.0	南砺市立福光美術館	
K9	石崎 光瑠	箕	1914	大正3	絹本着色 屏風二曲一双	各163.5*183.0	南砺市立福光美術館	第8回文展 褒状受賞
G1	篁 牛人	寒山拾得	1947	昭和22	紙本墨画 軸(双福)	各63.5*60.0	富山市篁牛人記念美術館	
G2	篁 牛人	金時と熊	1947	昭和22	紙本墨画 軸(双福)	各62.7*59.8	富山市篁牛人記念美術館	
G3	篁 牛人	南泉斬猫	1947	昭和22	紙本墨画 軸	63.6*66.8	富山市篁牛人記念美術館	
G4	篁 牛人	がま仙人	1948	昭和23	紙本墨画 軸	63.3*66.5	富山市篁牛人記念美術館	
G5	篁 牛人	仙翁移居	1948	昭和23	紙本墨画 軸	65.2*60.0	富山市篁牛人記念美術館	
G6	篁 牛人	雪山淫婆	1948	昭和23	紙本墨画 軸	65.0*60.0	富山市篁牛人記念美術館	
G7	篁 牛人	天台山豊干禪師	1948頃	昭和23頃	紙本墨画 額	179.0*570.0	富山県水墨美術館	
G8	篁 牛人	鳥とみみずく	1959	昭和34	紙本着色 軸	39.0*54.0	富山市篁牛人記念美術館	
G9	篁 牛人	釣人	1960	昭和35	紙本着色 額	40.0*54.6	富山市篁牛人記念美術館	
G10	篁 牛人	ナントユーフクフクシイコトヂャノー	1960頃	昭和35頃	紙本着色 額	40.5*54.5	富山市篁牛人記念美術館	
G11	篁 牛人	ウナラニヤナラヌホド…	1960	昭和35	紙本着色 額	36.2*39.2	富山市篁牛人記念美術館	
G12	篁 牛人	モリのナカより…	1960	昭和35	紙本着色 額	38.6*53.8	富山市篁牛人記念美術館	
G13	篁 牛人	コノ子ヲ忘レタ…	1962	昭和37	紙本着色 額	38.8*54.6	富山市篁牛人記念美術館	

## 二、画家、ほとばしる

K10	石崎 光瑠	燦雨	1919	大正8	絹本着色 屏風六曲一双	各176.0*370.0	南砺市立福光美術館	第1回帝展 特選
G14	篁 牛人	蛟龍	1967	昭和42	紙本墨画着色 屏風六曲一双	各169.8*347.9	富山市篁牛人記念美術館	
K11	石崎 光瑠	印度植物写生画卷	1916	大正5	紙本着色 卷子	42.5*580.0	富山県美術館	
K12	石崎 光瑠	第一次印度旅行 六(カシミール州・水郷)	1917	大正6	紙本着色 卷子	31.0*586.0	南砺市立福光美術館	
K13	石崎 光瑠	第一次印度旅行 七(カシミール州・リダール峡谷の花)	1917	大正6	紙本着色 卷子	30.5*574.0	南砺市立福光美術館	
K14	石崎 光瑠	インコ			紙本着色 額	73.5*50.3	南砺市立福光美術館	

No.	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法(縦*横)	所蔵	備考
K15	石崎 光瑠	ムクドリ的一种(題箋付)	1916-17	大正5-6	紙本着色 額	28.0*25.0	南砺市立福光美術館
K16	石崎 光瑠	カバイロハッカ	1916-17	大正5-6	紙本着色 額	27.5*40.0	南砺市立福光美術館
K17	石崎 光瑠	カシミア州の雀	1917	大正6	紙本着色 額	28.0*39.5	南砺市立福光美術館
K18	石崎 光瑠	ヤツガシラ	1916-17	大正5-6	紙本着色 額	36.0*27.5	南砺市立福光美術館
K19	石崎 光瑠	『印度窟院精華』	1919	大正8	コロタイプ印刷	38.0*27.5*6.0	南砺市立福光美術館
K20	石崎 光瑠	ヒマラヤスケッチ帖	1916-17	大正5-6	鉛筆、淡彩 画帖(3冊)	各10.4*18.4*1.0	高岡市美術館
K21	石崎 光瑠	印度再遊 九(曼草 無憂樹 雪山)	1933	昭和8	鉛筆、淡彩 画帖	37.4*29.0*1.0	高岡市美術館
K22	石崎 光瑠	印度再遊 十一(雪山)	1933	昭和8	鉛筆、淡彩 画帖	37.4*29.0*1.0	高岡市美術館
K23	石崎 光瑠	印度再遊 十六(菩提樹 珊瑚藤 狸々椰子)	1933	昭和8	鉛筆、淡彩 画帖	37.4*29.0*1.0	高岡市美術館
K24	石崎 光瑠	花鳥の図	1935	昭和10	絹本着色 額	77.7*149.7	富山県水墨美術館
G15	篁 牛人	『南国』スケッチ帖	c.1944-46	昭和19-21頃	画帖(2冊)		富山市篁牛人記念美術館
G16	篁 牛人	水汲み	1958	昭和33	紙本着色 額	38.2*54.0	富山市篁牛人記念美術館
G17	篁 牛人	南の島	1955	昭和30	紙本着色 額	39.6*50.7	富山市篁牛人記念美術館
G18	篁 牛人	裸婦	1963	昭和38	紙本着色 額	34.0*34.6	富山市篁牛人記念美術館
G19	篁 牛人	牛とながしの女	1962	昭和37	紙本着色 額	34.8*37.2	富山市篁牛人記念美術館
G20	篁 牛人	アイヌのますつき	1963	昭和38	紙本墨画 軸	37.4*52.3	富山市篁牛人記念美術館
G21	篁 牛人	狸々	c.1967	昭和42頃	紙本墨画 額	77.5*92.5	富山市篁牛人記念美術館
G22	篁 牛人	漢代婦女遊楽(木蓮の下で)	1967	昭和42	紙本墨画 額(一対)	各166.5*216.8	富山市篁牛人記念美術館
G23	篁 牛人	帰牧	1967	昭和42	紙本墨画 額	77.5*92.6	富山市篁牛人記念美術館
G24	篁 牛人	山姥と金時	1967	昭和42	紙本墨画 額	94.5*129.4	富山市篁牛人記念美術館
G25	篁 牛人	雷神	1970頃	昭和45頃	紙本墨画 額	85.0*95.0	富山市篁牛人記念美術館
G26	篁 牛人	春を吹く牧人	1969	昭和44	紙本墨画 額	85.9*94.7	富山市篁牛人記念美術館
<b>三、画家、きわむ</b>							
K25	石崎 光瑠	晨朝	1939	昭和14	絹本着色 額	178.8*169.7	富山県美術館 第3回新文展
K27	石崎 光瑠	隆冬	1940	昭和15	絹本着色 屏風六曲一隻	170.5*352.0	南砺市立福光美術館 紀元二千六百年奉祝展
K26	石崎 光瑠	聚芳	1944	昭和19	絹本着色 軸	105.0*157.5	南砺市立福光美術館 平安遷都千五十年奉祝京都市美術展
K28	石崎 光瑠	白斑の鷓雉 <small>ヤマドリ</small>	1938	昭和13	紙本着色 軸	89.0*119.3	高岡市美術館
K29	石崎 光瑠	早春写生	1940	昭和15	紙本着色	43.0*57.2	高岡市美術館
K30	石崎 光瑠	牡丹写生			紙本着色	55.8*71.5	高岡市美術館
K31	石崎 光瑠	鶏頭写生			紙本着色	80.0*108.5	高岡市美術館
K32	石崎 光瑠	スケッチ帖(黒部 虫 女郎花 撫子 朝顔 紅蜀葵)	1946頃	昭和21頃	鉛筆、淡彩 画帖	28.4*18.8*1.0	高岡市美術館
G27	篁 牛人	西王母と小鳥	1969	昭和44	紙本墨画 額	98.0*183.0	富山県水墨美術館
G28	篁 牛人	豊干禪師	1969頃	昭和44頃	紙本墨画 額	208.0*257.5	富山県水墨美術館
G29	篁 牛人	ゴータマ出家逾城の図	1969	昭和44	紙本墨画 額	205.5*264.5	富山県水墨美術館

## K1 富山湾真景図

「光瑤」の号を受けた直後の十四歳頃の制作と考えられ、明治期の活気ある伏木港周辺の町の様子と、湾越しにみえる立山連峰が詳細に描かれている。

## K8 鶴図

さまざまな姿態の真鶴を描いている。最小限に表現された背景は、鶴たちがゆったりと羽を休めて水辺に憩う様子であることを想像させ、その単純化が、徹底して写生された鶴をいっそう際立たせて、強い生動感を醸し出している。

## K9 筧

筧とは水を渡し引く掛樋のこと。画面全面に白い卯の花(ウツギ)と山百合をあしらい、横に渡された樋をたどる視線の動きとともに、画面が横に広がっていく効果をもたらしている。満開を過ぎて散り始めた花びらと、樋の上に羽を休める燕のつがいを描き、初夏の清々さと、暑くなる季節への移り変わりを感じさせる。第8回文展に出品され、宮内省買い上げとなった作品。

## G1 寒山拾得

寒山と拾得はともに中国・唐時代に天台山国清寺の豊干禅師の教示を受けた道士で、中国の宋時代、日本の鎌倉時代以降の水墨画に伝統的によく描かれた。ふたりは仲が良く、豊干とともによく奇妙な行動をとり他の僧たちを驚かせたとされる一方、詩人である寒山は文殊菩薩の権化、拾得は普賢菩薩の化身ともいわれる。牛人は自宅裏にあった洞窟の中でしばし時を過ごしたが、自身を寒山になぞらえていたのかもしれない。

## G3 南泉斬猫

禅の公案のひとつ。ある時、中国・唐時代の禅僧南泉普願の下に集まった弟子たちが、二手にわかれて猫の仏性の有無について論争していた。南泉は剣と猫を手にして、「仏性の真実をいわなければ猫を斬る」と迫ったが、誰も答えることができず、南泉は猫を斬ったという。その後、高

弟である趙州に話すと、彼は頭に自分の草履をのせて出て行った。南泉の行為は「仏法の真実、ものの有無に関わらず、現実をそのまま承認することにある」という考えを示し、趙州の行為は、猫を斬ったのは全く余分なことであるという意思表示とされる。牛人に多い道釈画においても説明的な描写を避け、人物画としての完結を図っている。

## G5 仙翁移居

細長い木の枝に身の回りの品と酒の入ったひょうたんを取り付け、足早に道を急ぐ人物は、中国・唐時代の詩人李白であろう。李白は酒豪としても知られており、若い頃は中国諸域を広く漫遊したといわれ、ここでは身軽な旅人としての姿で描かれている。背後の老木は牛人が得意としたモチーフで、渴筆表現が人物を程よく浮きたたせ、画面に緊迫感を与えている。後年の牛人の放浪生活と憧れの境地が不思議と重なる作品である。

## G6 雪山淫婆

長野・戸隠には、呪術を使ったために都を追放されて鬼女になった絶世の美女の伝説があり、山岳修験者たちと対抗したという。牛人は、女性像を「神聖なる畏れ」をもって描いたようである。女性が大地を意味し、山の神と崇められた古代日本の感性に、牛人は畏敬とあこがれの念を抱いていたのだろうか。

## K10 燦雨

突然のスコールの中、ホウオウボクの鮮やかな花の間を素早く飛び交う一群のインコと、天を衝くように鳴く樹上にある雌雄のクジャク。熱帯独特の花鳥の動きを、緻密な描写とたらしこみの技法で大胆に表現している。伝統的な花鳥画を礎にしつつも、インドでの実体験に基づいて描かれた南国の豊潤な生物には臨場感があり、近代の花鳥画を代表する名作となっている。

## G14 蛟龍こうりゅう

蛟龍は水中に潜み、雲雨にあえばそれに乗じて天上に昇り、龍となるとされる。時運にめぐりあわず、実力を発揮し得ないでいる英雄や豪傑を例えていることもある。この頃牛人は支援者の森田医師と出会い、それまでの放浪的な生活を脱して、画家として本格的な制作に専念し始めた。そうした作者のこれまでとこれからを映じたような、野心すら感じさせる大作である。

## K19 印度窟院精華いんどくつゐんさいか

本書は、光瑠のインド行を世話した人びとに感謝の意を示すため限定 200 部で出版された。エレファンタ、アジャンターなどのインド窟院の石彫芸術の写真をコロタイプ印刷で複製した 100 葉のポートフォリオ、紀行文を掲載した冊子からなる。絵画を本位とする光瑠にとって、すでに欧米で出版されていたこれら古代芸術の再掲は目的がなく、自分の心に強く靈感を刻み付けたもののみ、心の赴くままに撮影したという。レンズを介した画家の科学的で冷静な眼差しが興味深い。

## K21~23 インド再遊

1933 (昭和 8) 年、高野山金剛峯寺から襖絵揮毫の依頼を受けた光瑠は、新たな画題と画境を求めてインドを再訪する。画家としての躍進をかけた第一次行から十七年が経過し、南国の自然への讚美は鮮烈華麗な色彩の妙よりも、より静かで落ち着いたある深層探究の心へとかわっていく。

## G20 アイヌのますつき

本作は、森田医師が牛人の作品に注目するようになった最初の作品といわれる。この年牛人は旭川のアイヌの集落に立ち寄っており、伝統的な漁法でマスをとる彼らの姿を大胆な筆法で描いた。心象風景のようにもみえ、質の低い紙の色がかえって効果的でもあり、不思議な詩情をたたえた作品となっている。

## G21 猩々しょうじょう

猩々とは酒をよく飲むという想像上の動物で、全身が毛で覆われ、人間の顔をもつ猿のような姿であらわされることが多い。また、能の題材としても有名である。牛人も、猩々に劣らず酒好きであったといわれる。

## K25 晨朝しんちょう

晨朝とは午前六時前後の早朝のこと。画面にはつぼみをつけた牡丹、今を盛りに咲き誇る牡丹、間もなく散ろうとする牡丹の、花の三態が描かれている。越後の某家から譲り受けた牡丹がこの年見事に咲いたので写生に徹した、と記した昭和 11 年頃のエッセーがある。朝四時に起床、未だほの暗い中に咲く花に向かって写生を始めると、花葉は日中生气がなくなり、夕陽の陰りとともにまた回復するという。その生命の真美を見逃すまいとする、緊迫感すら感じられる。

## G29 ゴータマ出家逾城ごたまたしゅうじょうの図

インドの小国の王子であったゴータマ・シッダールタは、人生の生老病死の苦に疑問を抱き、妻子を残して出家を決意し、のちに釈迦となった。この画は王城を出て苦難の修業に旅立つ場面を描く。いなく馬のたくましさとは対照的に、その背に乗るゴータマの表情は静かである。